日経新聞 平成22年3月26日金曜日

グリーンBIZに挑む

第4部 循環型社会を築く ③

中小、廃棄物活用に商機

コスト競争力に強みも

「黒酢と焼酎かすの両方の健康成分を摂取できることが消費者に受けている」。食酢や農産加工品を製造する大山食品（宮崎県綾町）の大山憲一郎社長は昨年9月に発売した黒酢サプリメント「すだま」の売れ行きに満足そうだ。宮崎大学の六車三治男教授らの協力を得て約7年がかりで開発した商品で、毎月の売り上げは「最大で5%ずつ伸びている」。

同社が注力するのは廃棄物になることが多かった焼酎かすの有効利用。米焼酎かすに含まれるアミノ酸を活用した健康飲料「アミノ黒酢」も2006年の発売当初の2倍近い売れ行きだ。地元の川越酒造場（同県国富町）からの焼酎かす購入量は徐々に増え、現在は年50トン規模となった。

せっけんに応用

大山食品は芋焼酎かすに米酢のノウハウを絡ませ、畜産飼料や肥料への応用研究も進める。焼酎かすと黒酢の両方には肌がすべすべになる成分が含まれているとみて、せっけんなどへの応用を狙う。大山社長は「今年は研究が実を結ぶ集大成の年にしたい」と意気込む。

中小企業にとって、廃棄物などを有用資源として活用するリサイクル事業は目の付けどころ一つで大きな商機を生む。

自動車用吸音材を生産するフコク（福岡県柳川市）の工場。納入先の車部品メーカーから毎日、ポリエステルを主原料とする吸音材の端材が運び込まれる。色も形もバラバラの端材を機械でほぐし、新品材を混ぜたリサイクル吸音材を作る。

月産300トンの吸音材のうち、リサイクル品は10～15%を占める。06年にトヨタ自動車九州（同県宮若市）の生産車種に採用されてから「リサイクル品の比率は上昇している」（古賀新一社長）。

強みはコスト競争力だ。取引先にとって端材の処理費が不要となり、フコクは新品材より安く原料を調達できる。吸音性能は最大でも2割ほどしか低下しない。古賀社長は「今後は住宅分野も取り込みたい」と意欲を示す。

製造業では冷え込んだまま設備投資もリサイクル産業では新たな動きが出つつある。通常は焼却処分される使用済み紙おむつからパルプやプラスチックなどを回収するトータルケア・システム（福岡市、長武志社長）は、09年9月期に2期連続の最終黒字を確保。福岡県大牟田市の処理工場の稼働率は能力の8割前後に達し、熊本県などで新工場の建設を検討している。

現在、紙おむつから再生したパルプは防火材の原料として建材メーカーに販売している。しかし、同社が目指すのは再生パルプを再び紙おむつに使い、循環システムを築くこと。品質の高い再生パルプを大量に用意する必要があり、新工場が欠かせない。

廃材を奪い合う

リサイクルのすそ野が広がる一方で、「資源」を巡る競争も激しさを増している。「廃材がバイオマス（生物資源）発電との奪い合いになっている」。住宅などを壊した廃材と廃プラスチックから木の風合いを持った建材を作るエコウッド（北九州市）の和田理社長はこうこぼす。

同社の建材は廃材から作った粉末と熱で溶かしたポリプロピレン樹脂を混ぜて作る。廃材を粉末にするため、クギや石などの混合物をあらかじめ取り除く必要があり、手間がかかる。このため、廃材を扱う業者は燃やすだけのバイオマス発電に持ち込むことが増えている。

バイオマス発電との競争で廃材価格は事業を立ち上げた03年に比べ3倍にもなった。受注が増えており、「10年度も3割程度の売り上げ増が見込める」（和田社長）だけに、木材の使用量を減らしながら、同じ風合いを保つ建材を開発することなどを目指す。九州・沖縄で環境関連産業が広がるにつれ、それぞれがさらなる改革を迫られつつある。

建材に再利用する廃材がバイオマス発電と取り合いになっている（北九州市のエコウッド）

九州